

幼児の集団歌唱における歌声に対する意識の実態
—保育者および保護者を対象とした質問紙調査の分析をもとに—

羽根田 真 弓

Mayumi HANEDA : Actual Conditions of Consciousness of Children's Singing Voices in a Group
—Based on the Analysis of Teachers' and Parents' Survey in Kindergartens and Nursery Schools—

鳥取短期大学研究紀要 第63号 抜刷

2011年6月

幼児の集団歌唱における歌声に対する意識の実態 —保育者および保護者を対象とした質問紙調査の分析をもとに—

羽根田 真 弓

Mayumi HANEDA : Actual Conditions of Consciousness of Children's Singing Voices in a Group

—Based on the Analysis of Teachers' and Parents' Survey in Kindergartens and Nursery Schools—

幼児の集団歌唱では日常的に「どなり声」が観察される。そこで、この「どなり声」が保育現場においてどのように認識されているのかを明らかにするために、保育者および保護者を対象に質問紙調査を実施した。その結果、保育者は「どなり声」を問題視する一方で否定していない実態があり、保護者は「どなり声」を肯定的に受けとめていた。したがって、保育者、保護者および研究者間では子どもの歌声に関して見解の相違があることが明らかとなった。また、幼児の「どなり声」は心理発達と密接に関連していることが示唆できる。

キーワード：集団歌唱 どなり声 心理発達 対人関係 表出行動

1 問題の所在

なぜ、子どもたちは集団歌唱時に「どなり声」で歌うのか。研究者たちはこの「どなり声」を問題視し、音楽教育もしくは音楽的側面を焦点化して議論してきた。しかしながら、「どなり声」の定義およびその要因についてはこれまで明確にされておらず、したがって具体的な指導法も示されていない。

筆者はこの「どなり声」に注目し、2007年から実験および観察調査をおこなってきた。まず、保育者、保護者および保育学生を対象に、5歳児の集団歌唱時の歌声の印象評価実験（SD法）を実施した。その結果、聴取印象がそれぞれ異なっており、聴き手によってどなり声の質的定義が異なることを明らかにした（羽根田，2008）。さらに、ピアノ伴奏と子どもの歌唱行動に何らかの関連性があると仮定し、簡易伴奏と本格伴奏で5歳児を対象にグループ唱をさせた。その結果、本格伴奏では裏声で歌いだし、喚声点周辺でも裏声で歌うことから、本格伴奏

には裏声を出す何らかの誘因があること、一方簡易伴奏では「どなり声」になりやすい可能性が示唆できることを報告した（羽根田，2009）。

ところが、保育現場では「どなり声」が依然として観察される。また、「どなり声」に対する解明ができていないため、「どなり声」が疑問視されなくなっている傾向がある。言い換えれば、「どなり声」の問題意識が低下しているのではなからうか。そのために幼児の集団歌唱に対する指導法が確立されていないと指摘できる。

それでは、こうした「どなり声」は保育現場ではどのように認識され、歌唱指導がなされているのであろうか。研究者と保育現場では子どもの歌声に対する受けとめ方に相違があるのではないか、この意識の相違が子どもの「どなり声」の実態に反映していることが推測される。

そこで本研究では、子どもの集団歌唱における「どなり声」が保育者および保護者にどのように認識されているのかを明らかにするために質問紙調査を実施し、分析をおこなった。あわせて、「どなり声」

が日常的に観察されている現状において、音楽的側面以外にも何らかの要因があると考えられることから、この背景要因についても検討した。

2 方法

保育者を対象とした質問紙調査は、鳥取県内すべての幼稚園 35ヶ所と保育園 192ヶ所の合計 227ヶ所に依頼をし、191ヶ所から回答を得た。回答率は84%である。そして686人の保育者による回答を得た。内訳は男性保育者36人、女性保育者650人であり、年代別では20歳代184人、30歳代215人、40歳代151人、50歳代132人、60歳代4人である。

一方、保護者を対象とした質問紙調査は、鳥取県中部の幼稚園2ヶ所と保育所1ヶ所に依頼をし、203名の保護者による回答を得た。内訳は男性保護者1人、女性保護者202人であり、年代別では20歳代27人、30歳代142人、40歳代34人である。調査実施時期は、いずれも平成22年5月上旬である。

保育者を対象とした調査内容は、次の7項目である。

- 1) 子どもたちの集団歌唱時に「どなり声」が観察されるか（5段階評価）
- 2) 「どなり声」を意識しているか
- 3) 「どなり声」をどのように感じているか
- 4) どのような状況において「どなり声」が観察されるか
- 5) 歌唱導入時に言葉かけをするか、する場合、どのような言葉かけをするのか
- 6) ピアノ伴奏時に子どもたちに視線を向けるか
- 7) 小児唖声について意識しているか

一方、保護者を対象とした調査内容は、次の4項目である。

- 1) 子どもたちの集団歌唱に対する印象について（5段階評価）
- 2) 集団歌唱時の歌声についてどのように感じているか
- 3) 幼児の「どなり声」をどのように感じているか

- 4) 小児唖声について意識しているか

3 結果

- (1) 保育者を対象とした調査結果から示す。

- 1) 子どもたちの集団歌唱時に「どなり声」が観察されるか

5段階評価で回答を求めた結果を図1で示す。「どなり声がよく観察される」とする評価[5]および[4]は全体のおよそ4割を占めており、反対に、「どなり声が全然観察されない」とする評価[1]は全体の5%にしかすぎない。全体の平均値は3.1である。また、男女差では、男性保育者の平均値が3.4、女性保育者の平均値は3.1である。t検定の結果、有意であった ($t(684)=1.98, p<.05$)。

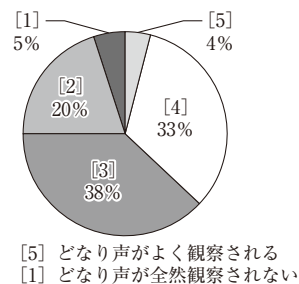


図1 どなり声が観察されるか（5段階評価）

- 2) 「どなり声」を意識しているか

「どなり声を意識したことがある」と、「どなり声を意識したことがない」のいずれかに回答を求めた。その結果、99%の保育者が「どなり声」を意識しており、保育現場では「どなり声」は明らかに意識されていた。「どなり声を意識したことがない」と回答したのはすべて女性保育者であった。

- 3) 「どなり声」をどのように感じているか

結果を図2で示す。明らかに「どなり声」は保育現場において問題視されている。一方、「どなり声が元気で子どもらしくてよい」という回答も全体の1割見られる。また、図3で示すように、男性保育者の3割は、子どもの「どなり声」を「元気で子どもらしい」と受けとめている。図4は、質問項目1)

の評価回答別による意識の割合である。

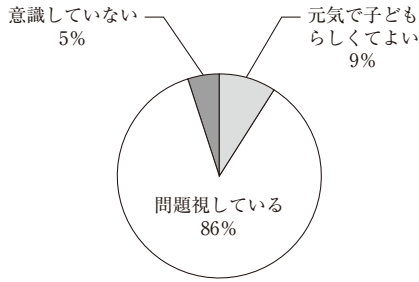


図2 どなり声に対する意識

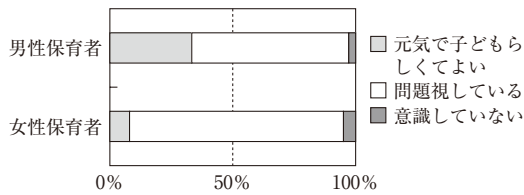


図3 男女差によるどなり声に対する意識

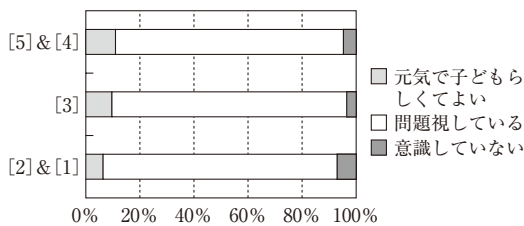


図4 質問項目1)の評価回答別による意識の割合

4) どのような状況において「どなり声」が観察されるか

あらかじめ設定した項目から複数回答を求めた結果が図5である。やはり「元気に大きな声でうたいましょう」という言葉かけは「どなり声」となることが明らかである。また、この結果から実際にこのかけ声が保育現場でおこなわれていることもわかる。そして、子どもたちの好きな曲、何度も歌う曲に「どなり声」が観察されることに注目できる。

これらの設定項目の他にも「気持ちが落ち着かず

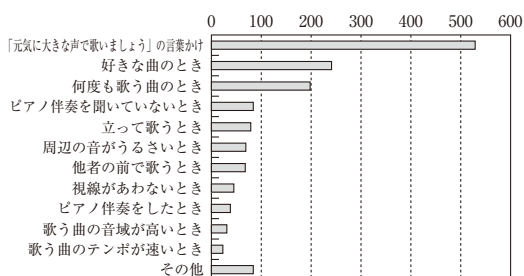


図5 どなり声が観察される状況

不安定なとき」「一人の子どもが突然どなり声で歌い始めたとき」「子どもたちがふざけ始めたとき」「小さな声で元気がないねと声をかけたとき」「歌うことに一生懸命すぎるとき」「自分の感情がコントロールできないとき」「集中力がなくなったとき」「張りきっているとき」「高揚しているとき」「広い場所で歌うとき」「面倒なとき」「落ち着かないとき」「競争心があるとき」「歌う機会が長くあいたとき」「調子についているとき」「ふざけているとき」「他児がほめられたとき」「ピアノ伴奏が大きいとき」「かけあいの曲のとき」などの具体例が報告されていた。

5) 集団歌唱時にどのような言葉かけをするか

集団歌唱時に言葉かけをする回答の割合は全体の93%であり、言葉かけをしないとする回答は7%であった。さらに、どのような言葉かけをするのかについて、あらかじめ設定した項目から複数回答を求めた結果が図6である。男性保育者と女性保育者による相違は見られなかった。さらに、質問項目1)の評価回答別による相違も見られなかった。

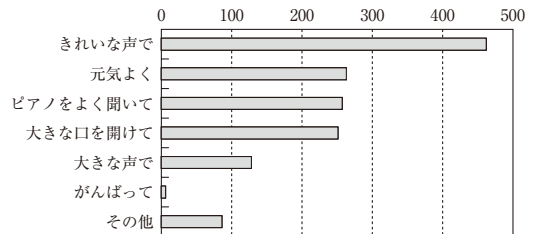


図6 集団歌唱時の言葉かけ

6) ピアノ伴奏時に子どもたちに視線を向けるか

結果を図7で示す。「ピアノ伴奏時に子どもたちに視線を向けない」「時々向けるとする回答」の割合はおよそ全体の半分である。

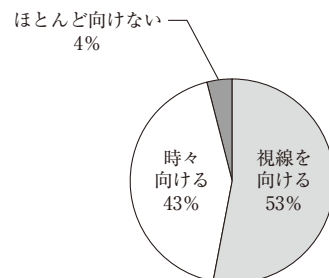


図7 ピアノ伴奏時の視線

また男性保育者と女性保育者では、男性保育者の「視線をほとんど向けない」とする割合が女性保育者の割合よりも多く見られた。この結果は図8の通りである。

さらに質問項目1)の評価回答別では、「どなり声が観察されない」とする[1]および[2]の方が、「どなり声が観察される」とする[5]および[4]よりも視線を向ける割合が多く見られた。この結果は図9のとおりである。

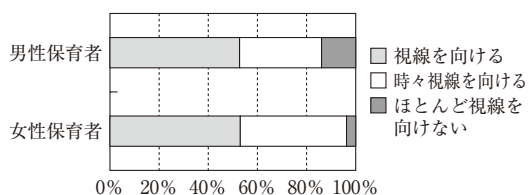


図8 ピアノ伴奏時の視線の男女差

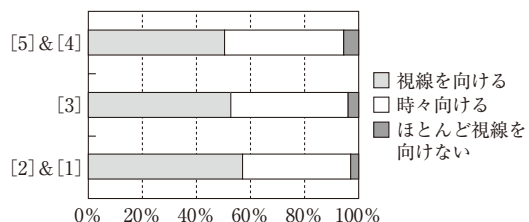


図9 質問項目1)の評価回答別による視線の割合

7) 小児唖声について意識しているか

結果を図10で示す。小児唖声を意識していない割合が全体の4割を超えている。

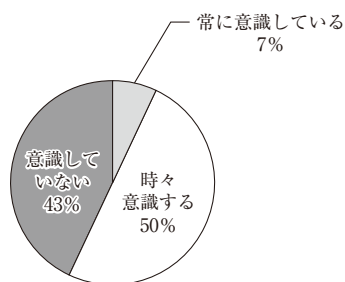


図10 小児唖声に対する意識

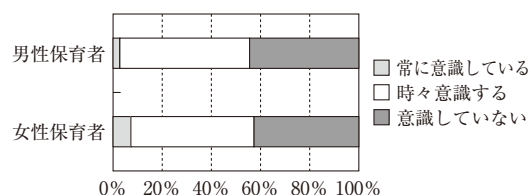


図11 小児唖声の意識の男女差

また男性保育者と女性保育者では、女性保育の方が男性保育者よりも小児唖声について意識している。この結果は図11の通りである。さらに質問項目1)の評価回答別による割合は図12のとおりである。

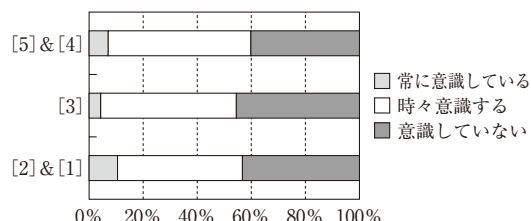


図12 質問項目1)の評価回答別による意識の割合

(2) 次に保育者を対象とした質問紙調査結果を示す。

1) 幼児の集団歌唱についてどのような印象を持っているか

5段階評価で回答を求めた結果を図13で示す。

「どなり声で歌っていない」とする評価[1]および[2]の割合は全体のおよそ4割を占めている。一方、「どなり声で歌っている」とする評価[5]は全体の2%にしか過ぎない。全体の平均値は2.8である。

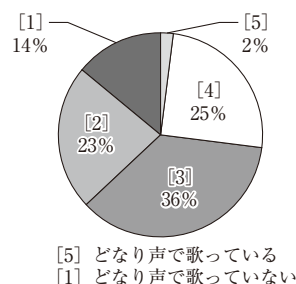


図13 幼児の集団歌唱に対する印象 (5段階評価)

2) 幼児の集団歌唱についてどのように感じているか

結果を図14で示す。幼児の集団歌唱を「子どもらしく健康的でよい」と受けとめている回答は全体の7割を占めている。また、子どもたちが「どなり声で歌っている」という回答項目も設定したが、「どなり声で歌っている」とする保護者の回答は皆無であった。

また、図15は質問項目1)の評価回答別による

割合を示している。「どなり声で歌っていない」とする評価 [1] および [2] の群で、子どもの集団歌唱を「子どもらしく健康的でよい」と受けとめられている。

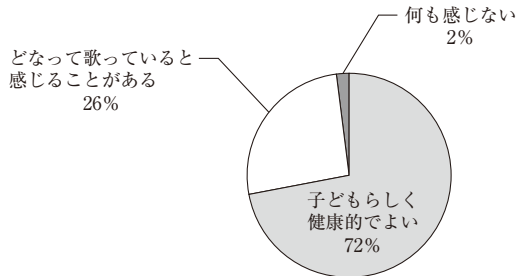


図 14 幼児の集団歌唱をどのように感じているか

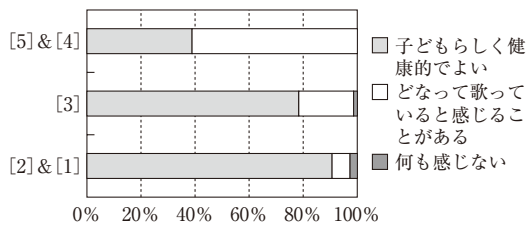


図 15 質問項目 1) の評価回答別による割合

3) どなり声で歌うことについてどのように感じるか

結果を図 16 で示す。「子どもらしく健康的でよい」と「何も感じていない」とする割合は全体の 8 割を占めている。そして、「何かしら問題を感じている」とする保護者の割合は全体の 2 割である。

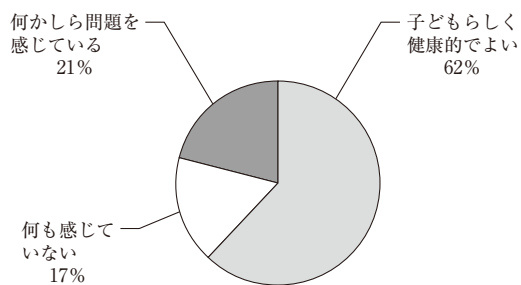


図 16 どなり声で歌うことについてどのように感じるか

4) 小児唝声を意識しているか

結果を図 17 で示す。小児唝声を意識していない保護者の割合は全体の 7 割を占めている。

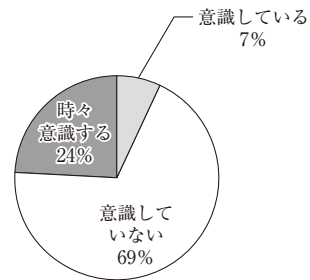


図 17 小児唝声に対する意識

4 考察

保育者を対象とした調査の考察から述べる。

まず、保育現場において子どもたちの「どなり声」に対する問題意識は浸透していることがわかる。一方で、質問項目 3) の結果で示されるように、子どもの「どなり声」を問題視している保育者の割合がおよそ 9 割ではあるものの、元気で子どもらしくてよいと捉えている保育者の割合も 1 割を占めている実態を見逃してはならない。そして、男性保育者には子どもの「どなり声」を元気で子どもらしくと受けとめる傾向が強い。

子どもの「どなり声」が保育者によって問題視されていると前述したが、それではなぜ保育現場において子どもたちが「どなり声」で歌う実態が認められるのか。

この背景には、保育現場においては「どなり声」を意識しながらも集団歌唱時には子どもたちに大きな声を求める傾向があることが指摘できる。つまり、保育現場における子どもたちの歌唱は大きな声であることが前提となっているのである。なぜならば人前で歌う発表会などでは特に大きな声を要求すること、日常的に「大きな声で」「元気よく」と言葉かけをすることが今回の調査において報告されている。その反面、「きれいな声で」「やさしい声で」と子どもたちに言葉かけした場合、子どもたちの声が途端に小さくなることも実態として報告されている。したがって、歌唱時の言葉かけに混乱があると言することができる。

さらに、保育者は「どなり声」を子どもの発達段

階の一部として捉え、「どなり声」にかかわらず子どもの歌いたい意欲、表現を重要視している。そのために「どなり声」を問題として取りあげる必要がないとする意見も多く見られた。この具体例では、「子どもたちが声を出してのびのびと気持ちよく歌えることが表現の一つとして大切である」「自己アピールの方法でもあり、子どもとの関わりを深めることが大切である」「どなり声も一生懸命に歌おうとする子どもの姿である」「どなり声も歌の発達段階の一つである」「自己主張の表れであり、どなり声とは感じていない」「どなり声であっても、子どもが楽しんで歌えるのであればよい」「子どもの歌いたい気持ちを優先する」「どなり声であっても、子どもの元気よく歌っている姿を否定できない」「子どもたちの姿を否定するのではなく、頑張りを認めながら、達成感や満足感を味あわせる」などの意見が見られた。

このように、保育者は「どなり声」を歌唱指導の問題であると意識しながらも、反面、子どもに大きな声を求めており、そればかりか「どなり声」を容認していると指摘できる。

次に、保護者を対象とした調査の考察を述べる。

図 13 および図 14 で示されるように、保護者は子どもの集団歌唱時の歌声を「どなり声」として受けとめていない。言い換えれば、「どなり声」で歌っているという意識がないのである。むしろ、子どもの声は大きな声でなければならないという意識が非常に強く、保護者は子どもの歌声には大きな声を必然的に求めている。具体的には、「子どもが一生懸命に歌っていてほほえましい」「元気があってほほえましい」「子どもらしくて元気でよい」「子どもたちが喜んで楽しめているのならよい」「人前で大きな声で歌う経験をしてほしい」「どのような声であろうと、大声を出すことは自分を表現する基本である」「子どもなりの表現である」「歌うことの楽しさを感じられればよい」と受けとめられている。したがって、保護者は「どなり声」を肯定的に捉えているのである。さらには、「どなり声」の指摘はあく

までも専門家の意見とし、「どなり声」という表現に対して多くの反論も示された。加えて、今回の質問紙調査実施まで子どもの「どなり声」に対する意識がなかったことや、「どなり声」という認識を初めて持ったことが示されていた。このように、保護者と研究者の間には、子どもの歌声をめぐる見解の相違があることが明らかとなった。

さて、「どなり声」は音楽教育において大きな課題であるが、はたして音楽的側面以外にも何かしら要因が横たわっているのではなからうか。

そこで、集団歌唱において「どなり声」が観察される 4、5 歳児の心理的発達に着目したい。

まず、この時期は対人関係が変化する。3 歳頃までは母親、家族、保育者あるいは大人との関わりの中で成長発達し、4、5 歳児になると対象が対一の大人ではなく、対人関係が変化して他児と関わるようになる。つまり、大人から子どもに対人関係がシフトする時期である。子ども同志の関わりに変化した中で、他児に認められるために、友だちに関心を持っていくようになる。この背景において「どなり声」を出すことが推測できる。他児と関わり、集団あるいは仲間の中で自分を意識し、自己を意識化していく。自己を肯定化していくのである。

さらに、「どなり声」は他児と競い合っ歌うことが観察されるが、これは 5 歳児頃になると対人行動で自分の優位を示そうする欲望が強まり、競争意識として動機づけされることが考えられる。子どもたちは競争することによって、他児の存在を認識して集団の中で自己を外面化していくのである。また、「～したら～になる」という因果関係を発見していく時期でもあり、自我としての「どなり声」になることが考えられる。

また、5 歳児の特徴として、共通のイメージを持って遊び、協調を意識しながら目的に向かって集団行動をすることがあげられる。したがって、集団歌唱時にはこの集団の力が大きく作用していることも考えられる。そして、仲間意識が発達し、自分も集団の一員であるという意識から「どなり声」を出しや

すいことも考えられ、この現象は男児によく観察される。さらに、日本は同一年齢保育が一般的であることから、そのために「自分は～できる」という子どもの自己意識から競争意識が強く表れやすいことも指摘できる。したがって、5歳児頃は対人関係において他児との関わりを顕著に意識し、さらには競争意識の中で他者との相互的な交渉をしながら成長していると言える。また、集団および仲間意識が強い時期である。

このように、子どもたちが「どなり声」で歌う背景には子どもの心理発達と密接に関連していることが認められる。子どもたちは他児との関わりにおいてどなる。他児に認められたいという心理においてどなるのである。さらに、他者との関係が広がり、同時に自我の形成をする。この自我の発達過程において子どもたちは「どなり声」として表現しているのではなかろうか。その結果として、子どもたちはどなる自分を「かっこよい」と捉えているのである。つまり、自己の外面化をしているのである。したがって、集団歌唱における「どなり声」を子どもの発達過程における対人関係の自己意識化による表出行動であり、自我を表象化した声であると筆者は定義したい。

以上、今回の調査において、保育者は「どなり声」を問題であると認識しながらも成長過程の表れとして「どなり声」を容認し、「どなり声」を否定しない現状が明らかとなった。一方、保護者は「どなり声」を子どもらしい声として受け入れていた。したがって、保育現場、保護者と研究者との間には子どもの歌声に関して見解が相違しているのである。

5 今後の課題

「どなり声」が音楽教育の分野で注目されてきたことは述べた。ところが、「どなり声」の現象には子どもの成長発達の要因が含まれており、この関連性についてさらに究明しなければならない。このことは、保育における発達をどのように捉え、保育の

場での育ちにおいて「どなり声」をどのように受けとめなければならないのかという課題である。

さらに、本調査結果において保育現場および保護者の子どもの歌声に対する意識が明らかとなったからには、保育者および保護者の「どなり声」に対する意識化も今後の課題として考えられる。

本研究においては子どもの歌唱行動の本質をあくまでも「どなり声」ではない声とした。しかし、子どもの心理発達との関連は排除できない問題であり、「どなり声」となるプロセスをふまえた歌唱指導のあり方を問うことが必要ではなかろうか。したがって、幼児の歌唱指導を検討するうえで、今後は幼児の歌唱行動をふまえた方法論を導かなければならない。

付記

本稿は、筆者が日本音楽教育学会第41回大会（埼玉大学、2010.9.26）でおこなった口頭発表を加筆修正したものである。

謝辞

本調査を実施するにあたり、鳥取県内の幼稚園および保育園の先生方、保護者の皆さまにご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 羽根田真弓「幼児の集団歌唱にみられる「どなり声」の実態（1）－ピアノ伴奏・指導者の声かけとの関連」、『鳥取短期大学研究紀要』第57号、2008、pp. 11-19
- 2) 羽根田真弓「幼児の集団歌唱にみられる「どなり声」の実態（2）－ピアノ伴奏との関連－」、『鳥取短期大学研究紀要』第59号、2009、pp. 13-18
- 3) 羽根田真弓「本格伴奏と簡易伴奏に対する5歳児の歌唱様相について」、『鳥取短期大学研究紀要』第61号、2010、pp. 11-18
- 4) 内田伸子「幼児心理学への招待—子どもの世界づくり—」、サイエンス社、1996

- 5) 心理科学研究会編「育ちあう乳幼児心理学—21世紀に保育実践とともに歩む—」, 有斐閣, 2004
- 6) 荻原はるみ「乳・幼児の発達心理学」, 保育出版社, 2006
- 7) 神谷栄司「保育のためのヴィゴツキー理論—新しいアプローチの試み—」, 三学出版, 2007
- 8) 赤津順子他「発達心理学—保育をめざす人へ—」, 樹村房, 2009